

翻 訳
1960～1990 年代 韓国キリスト教の成長と発展
～その現象と要因～

訳者 常石 希望

原著＜韓国キリスト教歴史学会編『韓国キリスト教の歴史 第Ⅲ巻～解放（1945）から20世紀末まで～』Seoul. 韓国キリスト教歴史研究所、2009、菊版、313頁＞

ここに翻訳したのは同書「第13章 教会の成長と発展」である。

韓国語原題＜한국기독교역사학회편 “한국 기독교의 역사. Ⅲ～해방 이후 20세기까지～” 한국기독교역사연구소, 2009＞“제 13 장 교회의 성장과 발전”

なお本翻訳の著作権は「韓国基督教歴史学会」および「同・研究所」に存す。

《解題》

本書は『韓国キリスト教の歴史（通史）』全Ⅲ巻の内の最終巻、第Ⅲ巻にあたる。すでに第Ⅰ巻（開教から1918年まで）、第Ⅱ巻（3・1独立運動から解放まで）はそれぞれ1989年、1990年の2年間の内に立て続けに出版されており、韓国はもとより世界中の学界、一般読者から好評をもって迎えられて久しい。例えば、第Ⅱ巻はすでに翻訳されて日本でも出版されている＜韓国キリスト教歴史研究所著、韓暫曦 蔵田雅彦監訳『韓国キリスト教の受難と抵抗～韓国キリスト教史 1919-1945～』新教出版社、1995＞。

ところが、すでに予告されていた第Ⅲ巻最終巻が出ない。5年待っても、10年待っても、さらに15年待っても出ないのである。結局、19年後に「待望久しき書」第Ⅲ巻はやっと出た。特に、最初のⅠ・Ⅱ巻が1989～90年に続けて出ただけに、本書はその分余計に世界中で「待望久しき書」となっていた。

しかし本書が「待望久しき書」であった理由は、なにも「19年後」という時間的理由によるのみではない。それ以外にも二つの理由がある。そ

の一つは「韓国キリスト教通史」諸書のなかでこの第三巻が扱う、1945年解放から2000年頃までを叙述した類書が皆無に等しいという理由に依る。元々韓国キリスト教史を通史的に叙述している著書は韓国でも少ない上に、1945年以降の現代史の部分に亘る通史がないのである。しかも、韓国が実質的あるいは量的にアジアや世界に誇る「キリスト教国」となったのは、1960年代～1990年代のことであった。ちなみに、1950年韓国の全キリスト者数の対国民比は4.1%、1960年は6.4%に過ぎず、これらは他のアジア諸国と大差のない平均的数値に過ぎない。それが1970年には9.7%に、1980年には19.3%、1990年に至っては29.1%と大成長を果たすのである。(統計はく姜グンファン『韓国教会の形成とその要因の歴史的分析』Seoul.キリスト教文書.2004>参照)。韓国キリスト教に対する世界の関心は、この1960年代～1990年代の大受容という現象の客観的記述、およびその受容の社会的原因や宗教的原因などにある。にもかかわらず、まさしくこのテーマとこの時代を叙述した通史が従来は実質的に存在しなかったのである。もとより、同テーマ、同時代の一部を断片的に詳述する論文類は少なくはない。しかし、研究者にとって「通史」の意義は極めて重要であると私は判断して来た。「木を見て、森を見ず」の譬えのごとく、数本の断片的木々をいくら詳細に観察しても、それは決して森の全景を理解したことにはならないからである。これが本書が久しく待望された他の理由であろう。

もう一つの理由は、本書の著者陣がほかならぬ「韓国キリスト教歴史研究所」あるいは「韓国キリスト教歴史学会」であるという点である。研究者の間では周知の事実であり詳細は避けるが、韓国キリスト教史関係において本研究所および本学会はトップの研究者が集まっており、もっとも信頼に足る研究機関である。重要な資料、一線級の研究書など本研究所で出版された資料・書籍は多数あり、学会誌「キリスト教と歴史」が年2回定期刊行され、質の高い論文が収録されている。一言で言って、これら同研究所・同学会の出版物なくしては韓国キリスト教研究は不可能に近い。その研究所・学会が総力を挙げて、しかもたっぷりと時間をかけて完成したのが本シリーズ『韓国キリスト教の歴史』であり、その完結巻第三巻である。久しく待望された理由がここにある。(なお、19年もかかった理由に

については本書冒頭の前置きに当たる部分で詳しく説明されている)。

本書は全Ⅲ巻であり、全体の構成は『第Ⅰ巻：第1章～6章（開教～1918年）』『第Ⅱ巻：第7章～9章（1919年三・一独立運動～1945解放）』『第Ⅲ巻：第10章～17章（1945年解放～2000年）』となっている。ここに翻訳したのは第Ⅲ巻の内の「第13章 教会の成長と発展」であるが、この13章を先ず翻訳したのには理由がある。つまり13章は、1960～1990年までの韓国キリスト教「大成長期」を主題としている点、しかもその大成という現象内容を客観的に叙述している点、さらにその成長の原因を主に社氣的要因と教会内的要因の二点から考察するという極めて重要な部分だからである。記者にとっても第Ⅲ巻中、もっとも関心の高い部分である。この第13章の「目次」を下に記しておきたい。

----- 【目次】「第13章 教会の成長と発展」(『韓国キリスト教の歴史 第Ⅲ巻』) -----

- 第1節、教会成長の諸現象
- 第2節、教会成長の社会的背景
- 第3節、教会成長の原因
 - (i) 復興運動と教会拡張運動
 - (ii) 教会成長論の導入
 - (iii) パラ・チャーチ (Para・Church) 運動
- 第4節、海外宣教

翻訳にあたり、表題を「1960～1990年代 韓国キリスト教の成長と発展～その現象と要因～」とした。原注は()で示し、訳者注・訳者補訳は[]で示した。またキリスト教は「X教」、プロテスタントは「P」、カトリックは「K」と略した。なお訳者は同研究所の出版物の一部をすでに許可を受け翻訳刊行しているが、今回も快く承諾いただき感謝の言葉を述べたい。本翻訳の著作権は「韓国キリスト教歴史学会」「同・研究所」に存する点を重ねて述べておきたい。

————— 以上《解題》

第1節 教会成長の諸現象

1960年代から1980年代におよぶ期間は、韓国プロテスタント〔以下、P〕キリスト教〔以下、X教〕が異例の量的成長を遂げた時期であった。この期の成長は何よりも、教会と教会員の数が急増する現象のなかに現れた。1993年度の韓国宗教社会研究所の統計によれば、1950年に3,114箇所であった教会が、1960年には5,011箇所に増加し、1970年には12,866箇所、1980年には21,243箇所、そして1990年には35,819箇所とそれぞれ増加している⁽¹⁾。この10年単位の教会数増加率を細かく調べると、1960年と1970年の間には157%、1970年から1980年の間には65%、そして1980年から1990年の間には約69%が増加したこととなる。全体的に見れば1960年から1990年までの30年の間に、韓国の教会は7倍以上に増えたのである。

教会数の増加は、教会員の数の増加にともなって起きた現象であった。信頼度に問題があったり、あるいは数値が互いに一致していないとはいえ、1960年代から1980年代にかけての韓国X教教会員数に関する諸統計が説得力をもって確認させてくれる点は、この期の教会員数が大きく増加したという事実である。特に1970年代は、教会数のみではなく、教会員数も爆発的に増えた時期であった。しかも、教会員数の増加の幅のほうが、教会数増加よりも多かったという事実を確認することができるが、この事実は韓国X教が量的に成長する過程において、個別教会の規模のほうが〔教会の総数よりも〕徐々により大きくなっていったという事実を示唆している。

《表》において確認できるように、韓国P教会の量的成長は1980年代まで続いた後、1990年代に入ってからはその勢いが急激に鈍化した。すなわち6・25戦争〔朝鮮戦争、韓国動乱、1950年6月25日開始〕以降継続し続けた韓国X教の量的成長の勢いは、1960年代に入り大きく増加し、1970年代後半にその頂点に達したのち、1980年代には鈍化して、1990年代半ばに至ってその成長は中断された。

(1) 韓国宗教社会研究所『韓国宗教年鑑』Seoul. 韓国宗教社会研究所.1993.参照.

1960～1990年代 韓国キリスト教の成長と発展

1960年代以後の韓国X教の成長は、ルター教、ナザレ教会、オ・スンヂョル [오 순절] 教会のような“新教団”が伸びたためでもあったが、しかし何と言っても教会全体が大きく成長した点にその原因を求めることが出来る。教勢の増加は、ほとんど全ての教派におよぶ現象であった。ただしそれらの内にあっても、特に注目に値する成長をなしたのはオ・スンヂョル教会（神の聖会、하나님의 성회）であった。1950年代までは会員数1万名にも満たなかったオ・スンヂョル教会は、1980年代に至り汝矣^イ高純福音教会だけでも20万人の会員を有す教団に成長した。“[ホーリネス系] 聖潔教会”も1960年代から大きく成長し、韓国キリスト教の主流教団に定着した。同教団の統計によれば、1950年代末約10万名であった教会員が、1970年代までには3倍に増加し、1990年代には基督教^{キリスト}聖潔教会（基聖）だけでも60万名を超えた。かくして聖潔教は、1950年代までは長老派の基長^{キジン}[韓国基督教長老教会]や高神[大韓イエス長老会高神教会]より教会員が少なかつたにもかかわらず、1970年代を経ながら長老教（統合）、長老教（合同）、それに監理教 [メソヂスト] に次ぐ教勢を有すようになった。

《表》韓国X教教会員数の変化（1950～2005）⁽²⁾

[プロテスタントP、カトリックK]

年度	総人口	P会員数	人口比P	K会員数	人口比K	P:K.会員数比
1950年	20,188,641 (1949年)	500,198 <i>a</i>				
1960年	24,989,241	623,072 <i>a</i> 1,524,258 <i>β</i>				
1970年	31,435,252	3,192,621 <i>α</i>				
1980年	37,406,815	7,180,627 <i>γ</i>				
1985年	40,419,652	6,489,282	16.00%	1,865,397	4.60%	1:0.29
1995年	44,553,710	8,760,336 (+35%)	19.70%	2,950,730 (+58.2%)	6.60%	1:0.37
2005年	47,041,434	8,616,438 (-1.6%)	18.30%	5,146,147 (+74.4%)	11.00%	1:0.60

「韓国統計庁」による。それ以外の統計出典——*a* 韓国宗教社会研究所『韓国宗教年鑑』1993
β 韓国X教教会協議会『X教年鑑』1970
γ 文化広報部『宗教法人および団体現状』1980

(2) どの国であれ宗教人口の統計には、その信頼度において一定の限界がある。韓国の場合、1960年までは人口流動が激しかった上に客観的な統計自体が少なく、そののちには各教会と教団の誇張された報告のせいで信頼できる数値を得るのはきわめて困難である。人口国勢調査に基づく統計庁の資料が相対的に信頼度が高いものと認定されている。

“浸礼教 [バプテスト]”も、1970年代後半から大きく成長した。浸礼教は1960年代までは、全国に教会数が200余しかなかった。それが同教団の積極的教勢拡張の努力が実を結び、1984年初めて教会数が1,000を超え、その後1990年までの間は毎年100の教会を増加するという成長の勢いを示した。他方、規模が小さい教会のなかでも、教勢が成長したのものも少なくなかった。例えば解放直後5,000名であった”聖公会“の信徒数は、1990年代には5万名にまで増加した。1965年イ・チョンファンが初代の韓国人主教として叙品 [聖職受任] され、久しい宿願であった「韓国人の教会」に向けて基盤を固め、さらに既存のソウル教区に加え、1974年までには大田教区と釜山教区を新たな教区とすることが出来た。大韓聖公会は1993年4月キム・ソンス大主教の初代管区長就任式の実現にあわせ、独立管区として昇格を果たした。

伝統的に韓国X教を主導して来た“長老会”の教勢も、大きく成長した。しかしながら教団の分裂が激しかった長老教^[訳.1]では、各教団ごとの成長率はかなりの偏差を呈した。長老教でもっとも大きく成長したのは、元々教勢が大きかった合同側と統合側であった [合同派も統合派も、「大韓イエス長老教会 (イエス^{ジョン})」の傘下に属す教団]。この二つの長老教教団は、特に1970年代に入り急成長を遂げたが、この期の内にそれぞれ2倍以上教勢を伸ばし、会員数は100万名を超えた。統合側は相対的に豊富な人材と包容力に富む神学を十分に活用することによって、合同派の方は保守的な神学を掲げることによって、それぞれ教勢を大きく拡張した。長老教団のなかでも、もっとも保守的な神学伝統を守って来た高神派は、合同派と統合派に比べかなり小さい教団であったが1970年代に教勢が2倍化し会員数は20万名を超えた。これらに比してもっとも進歩的な神学に立つ韓国基督教長老会 [基長^{キジョン}] は、他の代表的長老教団のようには量的成長を果たすことが出来なかった。その理由は、他の諸教団が教勢拡張した軍事独裁の時期に、基長 (韓国基督教長老会) は個人の魂の救いに焦点を当てるよりは、むしろ「神の宣教 (Missio Dei)^[訳.2]」の原則に立脚して民主化運動、人権運動、労働運動などを通して、社会の構造悪と闘うという [社会的] 活動に多くの関心を傾けてきたという事実に関連しているものと思える。

長老教と共に、韓国X教の二本柱を構成して来た“監理教^{メソジスト}”も粘り強く

成長を続けて来た。監理教は「神の宣教」を宣教神学の基礎に据えて、韓国の伝統文化と伝統宗教を重視する土着化神学を展開するなど、長老教に比べれば概して進歩的側面を見せた。しかしながら監理教成長の原動力となったのは、教団次元での教勢拡張への努力と教会員の熱情的な信仰であった。監理教は1970年代に著しく成長し、1970年から1978年の間だけでも約29万名から60万名へと、教会員数が約200%も増加した。監理教を始め、オ・スンギョル教会、聖潔教、浸礼教など、長老教以外のこれら種々教団の目を見張るべき成長は、長老教が韓国X教に占める相対的比重の縮小化を感じさせるといった結果をもたらした。

急成長を果たした教会の活力と自信は、韓国教会が“宣教100周年”を記念した1984年前後に最高潮に達した。韓国教会は100周年記念行事を盛大に執り行なうため、1981年からほとんど全教団次元での協議会を作り準備した。記念物として100周年記念塔（仁川の沿岸埠頭）、宣教記念館（楊花津^{ヤンファジン}）、殉教者記念館（龍仁^{ヨンイン}）が建てられ、イエス教長老会（統合）と監理教はそれぞれ教団次元での記念館を建てた。100周年記念行事の一環として「愛の実践運動」も開催され、無料の開眼手術専門病院設立への後援、献血運動、親のいない不遇な児童のための養子結縁に対する特別支援などが実施された。また、身内が刑務所に収監されている全国の不幸な家族を救援する運動、あるいは結核患者自活村への助成運動も展開された。100周年を記念する「宣教大会」が、[青年会、婦人会など]分科別、および地域別に開催されたが、なかでも1984年8月15日[すなわち「解放の日」]から5日間のあいだ、感謝と悔い改め、成長と更新、平和と南北統一、世界宣教などを主題としてヨイド広場において開かれた韓国X教100周年宣教大会は、この記念行事の頂点^{ピーク}であった。宣教大会の期間中、国内外から350万人以上がこれに参加して、韓国教会の底力を誇示した。大多数の教団が公式に参加したこの大会は、100周年を期して過去を反省し、かつ未来のための課題を提示したという点で、大いなる意義を有す行事となった⁽³⁾。そののちにも、殉教者追慕礼拝、記念大公演、女性大会など様々の記念行事が翌1985年10月まで引き続いて開催された。

(3) パク・チスン「100周年宣教大会の歴史的意義」『100周年』第12巻1984.10.31.p.3. 参照。

このような雰囲気は、1988年ソウルオリンピックまで続いた。韓国教会はオリンピックを世界宣教の格好の機会として捉え、活発な宣教活動に臨んだ。25の教団および200余の宗教団体によって‘88ソウルオリンピック伝道協議会’が組織され、様々な方式による伝道活動が繰り広げられた。この協議会は大会期間中、38カ国の言語に翻訳された300万部の伝道誌、10万本のオーディオテープ、そして40万部の聖書を外国人に配布し、また韓国文化と韓国X教伝来の歴史などを紹介したビデオテープ3,000本も制作して選手たちに配った⁽⁴⁾。

こうした活動にもかかわらず1980年代に入ると、韓国教会の成長は徐々に鈍化し始めたのである。大部分の教団は1970年代（特にその後半）に最大の成長の勢いを見せたのち、1980年代に入ると共にその成長の勢いは大きく弱まるという現象を示した。例えば長老教会（統合）は、1970年代後半までは毎年2桁台の成長率を示したが、1980年代に入ると急に平均5%以下の成長率に低下した。また監理教もこれと類似的で、1970年代後半までは毎年10～20%ずつ教会員が増えていたのに、1980年代には5%以上成長する年はほとんどない程に、成長は大きく鈍化した。各教団において発表する教勢統計というものがあるが、総じて誇張されたものであるという事実を勘案すれば、成長の変化に関する実際の度合いはこの程度ではないことが推測される⁽⁵⁾。1970～80年代、韓国教会の成長を代表して来たオ・スン Chol系教団と聖潔教も、1990年代前半からは会員数がほとんど増加しなかった。

1990年代前半以降には、全般的に韓国P・X教〔プロテスタント・キリスト教〕の会員数が減少するという現象が現れ始めた。2005年度の統計庁の調査によれば、P〔プロテスタント〕教会員数は約861万名であり、これは1995年（876万名）に比し約14万名余が減少したことを意味する。P教会員数の減少に対し、同時期（1995～2005年）のK〔カトリック〕の方は逆に75%近い成長率を実現しており、これは大きい対照的現象とすべきである〔上《表》参照〕。

(4) 東亜日報、1988.7.30. 参照。

(5) 人文研究室『社会変動と韓国の宗教』Seoul. 韓国精神文化研究院, 1987.p.193. 参照。

第2節 教会成長の社会的背景

1960年代から約30年間、韓国の教会にもっとも根本的かつ全体的な影響を与えたのは[南北]分断という構造であった。1961年5月、クーデターによって政権を執った軍事政権は「まだ終わっていない[南北の]戦争」を表向きの理由にして、極端な反共主義に基づく軍事独裁を構築していった。権威主義的で強圧的な朴正熙^{パクチヨンヒ}政権は国民の基本的な諸権利を踏みにじり、民主的政治行為を弾圧した。1972年10月に始まった維新体制^{ウニョン}は、かかる帝王的独裁の極端な姿にはかならなかった。そのため抑圧的な独裁政権の下にあって、自らの欲求を表出しようとする道を遮断された国民は、次第に過酷な欲求不満の状況に追い込まれていった。

1960年代から1980年代におよぶ軍事独裁の時期、政府は経済成長を政権の死活を賭けた問題とし、それをあらゆる政策の最優先課題とした。一般に開発独裁^{ウニョン}期と称されるこの期の経済成長は、輸出を中心とした物量的経済成長をその核心としていた。外債依存、労働集約型産業、輸出第一主義に代表される1960年代および1970年代の経済開発は、特定企業に対する特惠、低賃金と劣悪な労働環境、農村の疲弊、偏^{かたよ}った富の分配、慢性的インフレなどの諸問題を量産した⁽⁶⁾。国家経済はまさに刮目^{かつもく}すべき外面的成長を続けていったものの、その経済成長がもたらした果実はすべての人々に分配されたわけではなかった。結局、経済成長は社会階層構造をピラミッド型に固定化させ、階層構造の下層部に取り残された大多数の国民は、経済が発展すればする程ますます増大する相対的剥奪感^{はくたつかん}のなかで不満と不安をつのらせて生きなければならない有様であった。

産業化が進行している間、農漁村の人々は都市がもたらしてくれる経済的・教育的・文化的好条件に惹かれて、大挙して都市に移り住んだ。1960年全人口の28.0%であった都市人口は、1990年にはその2倍をはるかに超える74.4%に増加している⁽⁷⁾。都市化された産業社会での生存競争と

(4) 東亜日報、1988.7.30. 参照。

(5) 人文研究室『社会変動と韓国の宗教』Seoul. 韓国精神文化研究院,1987.p.193. 参照。

(6) 開発独裁と関連する種々問題については、<イ・ビョチョン編『開発独裁と朴正熙時代：私たちの時代の政治経済の起源』Seoul. 創作と批評社.2003 > 掲載の各論文参照。

物質主義・拝金主義的価値観は、共同体を破壊し人間関係を崩壊させてしまい、個々人は自己のアイデンティティー [自己同一性] ^{〔訳6〕} に深刻な分裂の危機を孕むようになった。各人が異なる [文化的] 背景を有し、打算的な人間関係によって構成されている都市、その都市の中で、人々は個人的で人間的な関係性を失っていかざるを得なかった。しかも韓国の市場経済は開発独裁という構造的限界の下に置かれていたため、正当な原則と秩序を保った競争を期待することが難しい状況にあった。そのため支配層にある者たちの多くは、政治と経済が癒着した状況を利用して法と秩序を尊重せず、特権層の道徳的墮落と法軽視は、結局は社会全体の不道徳、要領主義、便法主義を蔓延させるという結果を招いた。1970年代から1980年代半ばまでは、反共主義、軍事国家主義、官僚主義、成長万能主義などが、いっそう猛烈に推し進められた時期であった。このようにして、開発独裁はアノミー (Anomie) ^{〔訳6〕} 現象を生み、韓国人は共通の価値観や道徳的規範を喪失しつつ混沌状態に落ち込み、韓国社会は種々の病理的現象を呈した。

都市にあって疎外感とアイデンティティーの危機を感じた人々にとって、宗教は所属感とアイデンティティーを提供する格好の場となるものである⁽⁸⁾。集団よりも個人の救いを強調し、近代的個人主義ともよく調和していたX教のほうが、仏教・儒教・巫教 [シャーマニズム] など韓国でも伝統的社会と癒着していた諸宗教よりも、より都市の人間に好ましい安息の場を提供することが出来た。そのために都市化が進行するに従って、X教信徒の数が増加するという現象が生じたのである。農漁村よりは都市、その都市の内でも大都市であるほどX教信徒の比率が高かった。例えば1985年の人口センサス [国勢調査] によれば、全国の [P] X教人口は約650万名で、全人口の約16%であった。しかしながらX教人口の比率を、市、^{ウップ} 邑、^{ミョン} 面の単位に細分化して詳しく調べてみると、それぞれ18%、13.6%、11.6%となっていた [市、邑、面はいずれも道の行政区画であり、

(7) 小林孝行「ソウルへの集中と地域格差の拡大～韓国人の人口現象～」、小林孝行編『変貌する現代韓国社会』世界思想史社、2000、所収、p.99 参照。(三井ケン「韓日P教会成長の比較研究」ソウル大学国際地域院修士論文、2001.p.41 から重引)。

(8) Thomas F.O'Dea, *The Sociology of Religion* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1960) 特にその第1章参照。

市がもっとも大きく、邑は人口2万以上5万以下、面はそれ以下の区画]。これは都市化がより進んでいる地域ほどX教信徒の比率が高いという事実をよく示している数値であり、都市化がX教成長に与えた影響を推測させてくれる。

浸礼教 [バプテスト] の成長過程は、この期の教会成長が急速な都市化によって引きこされた社会変化にいかにして対応するかにかかっていたのか、という事実をよく示してくれる。韓国の浸礼教会は、伝統的に農村にその基盤を置いていた。そのため浸礼教会は1957年から、農村を目標にした直接伝道事業 (Direct Evangelism) によって教勢拡張を試みていた。しかし次第に産業化、都市化して行く社会構造下、農村を目標とした伝道事業によって成功を収めるのは難しかった。1958年に208箇所であった浸礼教会の教会数は、10年すぎたのち [1968年]、やっと16教会が増加したに過ぎなかった⁽⁹⁾。浸礼教会はこうした事実を認識して、1970年代後半からアメリカ南バプテスト会海外宣教本部と共同して都市中心の伝道大会を開催し始めた。その結果は目を見張るほどのものであった。

南北分断と開発独裁の状況がもたらした心理的不安感、政治経済的不均衡、社会的不満、そして価値観の混乱などは、ただ単にX教だけの成長に有利であっただけではなく、他の宗教全般が成長するための有利な条件でもあった⁽¹⁰⁾。人々は不満・不安・恐怖のゆえに、心理的安定を求めようとして宗教全般に帰依した。価値観が揺れ動きアイデンティティーを喪失した人々は、宗教のなかに所属感と連帯感、共同体意識を感じ、明確な価値観と生きることの意義を発見し、使命感と希望を持ってアイデンティティーを確立することが出来た。また人々は、不公平な経済構造の内を感じる欲求不満を解消するためにも、宗教を求めた。宗教は、経済的利益の分配が十分に果たされていないため相対的な剥奪感を感じている人々に対し、現世的・物質的な祝福を約束する強力な代償的機能として作用した⁽¹¹⁾。

(9) ホ・ギン『韓国浸礼教会史』p.539. 参照。

(10) キム・ビョンソク「韓国教会の現状の社会科学的理解」、『神学思想』第35集1981.12, 所収 pp.704-710 参照。

(11) Charles Y. Glock, "The Role of Deprivation in the Origin and Evolution of Religious Groups" in *Religion and Social Conflict*, ed. R. Lee and M.E. Marty (New York: Oxford University Press, 1964), pp.24-34. 参照。李元奎, "宗教社会学的接近", 『韓国教会の成長鈍化に対する分析と対策』Seoul. 崇実大学校韓国X教文化研究所. 1998.p.159 から重引。

従って1960年代以降、韓国ではX教や仏教のみではなく様々の新興宗教が全般的に成長するなかで、現世的な幸福を約束する宗教や教派ほどより大きい成長を果たした⁽¹²⁾。物質次元において相対的な剥奪感を感じている人々に慰めを与え、成功への動機付けと誘発をなし、そのように彼らに物質的な祝福を約束する教会であればあるほど、より多くの人々を招き入れることが出来た。積極的思考、成功の福音、豊かさの福音など資本主義化された福音のメッセージは、この時期大きく発展した教会では共通して聞くことの出来る説教の内容であった。

社会的混乱が教会の成長に寄与するという逆説は、社会が不安で混乱している時大きく成長した教会が多かったという事実によって明らかなものとなった。例えば軍事政権が開始した1961年に、ソウル西大門で始められたチョ・ヨンギとチェ・チャシルのヨイド純福音教会は、維新体制が本格化した1974年から爆発的に成長し始めた。1960年代後半から1970年代初めにかけて、教会員が毎年約1,000～2,000名ほど増加していたが、1973年から翌1974年の1年間の内には実に6,300名余も増加している。このような爆発的成長はその後も続き、1970年代後半に至っては毎年1年に3～4万名ずつ教会員が増加するという現象を示した。かくして、1971年には1万人にも満たなかったヨイド純福音教会の会員数は1981年には20万人を超えた。ヨイド純福音教会が20倍以上もの教勢大拡張を果たした時代、それは維新独裁が始まり、ますますその残虐性をつのらせ、やがて一旦は自滅したのち、さらにより弾圧的な軍事政権が取って代わり、経済的にも国際的な危機にさらされた、そのような暗く陰鬱な10年間であった⁽¹³⁾。これらは程度の差こそあれ、この時代に大成長を遂げた巨大教会が等しく歩んで来た共通の姿〔共通の社会的背景〕に他ならなかったのである。

(12) 李元奎「都市教会と農村教会」, 李元奎編著『韓国教会と社会』Seoul. ナグン.1991所収 pp.142-143. 参照.

(13) ハン・ワンサン「教会の量的急成長に対する社会学的考察」, 同 192 頁に整理されている「年度別教勢成長の現状」参照.

第3節 教会成長の諸原因

1960年代以降の韓国X教の量的膨張は、宗教の外側の要因〔すなわち社会的、歴史的、文化的要因〕によってのみ説明できるものでは決してない。この時期の韓国教会は、人々が宗教を必要とする時、人々のその需要を鋭く感知し適切に対応した。韓国のX教は、社会の混乱と人々の不安に対し、適切な宗教的対案と避難場所を提供しながら成長した。この時期に韓国教会は、教会成長に効率的な新しい神学と方法を導入し、競争力に富み、かつ積極的な復興運動リバイバルと教勢拡張運動を繰り広げて、様々な宗教的需要に応えるプログラムを開発し、平信徒たちの信仰を強めた。そのようにして膨張した教勢を、地域社会に対する奉仕と海外宣教に転換し、成長のエネルギーを極大化させようと努力して来た。他方X教信者が急増している最中に、教会の伝統的神学の枠組を脱け出したパラ・チャーチ(Para・Church^{〔訳、7〕})運動が、職場と大学を中心に起きたりした。

3節-(1) 「復興運動リバイバルと教勢拡張運動」

韓国X教は1965年“P宣教80周年記念”を迎え、大々的に“民族福音化運動”を展開した。Pの種々教団が連合して、「3,000万人をキリストに！」という標語の下に展開したこの伝道運動の目標は、すべての同胞民族がみな福音に聞き従うようにしよう、というものであった。韓国X教全体が動員されるなかで、1年の間展開されたこの伝道運動は農漁村と都市、学園と軍隊、個人と集団など様々な分野を対象として、教団ごとに、あるいは教団が連合して、多様な方法によって展開された。“民族福音化運動”は神学と教理の違いを超えて、すべてのX教教派と教団が共に参与し、共に進めた最初の伝道運動であったという点において、また解放以後に開催された最初の大規模復興集会であったという点において、まさに歴史的な意味を有していた。しかしながら、超教派運動および教勢拡張が本格的に展開されたのは1970年代からであった。

1970年代は、韓国X教100周年を目前に控え、各教団が競って教勢拡張運動を繰り広げた時期であった。長老教の合同側は“1万教会運動”を展開し、統合側は“年間300教会開拓運動”を展開していた。一方、監理

教は1974年の総会において“5,000教会、100万信徒運動”を決議したのち、またこの目標を1976年の全国宣教大会を経て、1985年までに達成することを決議して教勢拡張に乗り出した。監理教と共にウェスレー神学を共有しているとは言え、相対的に保守的な立場に立っていた聖潔教も“1万教会、300万信徒”という遠大な目標を掲げ十字軍伝道隊を運営した。1973年“神の宣教”の原則を採択し社会救済に関心を向けた長老教基長〔韓国基督教長老会〕側も、他の教団がすべて教勢拡張に乗り出した時、自らも量的成長に関心を持たないわけにはいかなかった。1975年、基長は1984年までには2,000教会に成長するという計画を樹立し、その実行に向けて乗り出した。各教団は伝道と教勢拡張を効果的に実施するため、教団の組織を改編した。〔例えば〕教団によっては、教会を開拓する目的のために、一定期間は単独教域においては一人だけに牧師按手を与えるという方法を採択して〔従ってその教域で教会を建てたい他の牧師は按手を受けられないため、開拓伝道するしかない等を規定し〕、教勢拡張の効果を試みることもした。またそれぞれの教団は、教勢拡張に教会員を参与させるという目的のため伝道訓練を実施したり、そのために復興伝道集会を大々的に開催した。

この時期の韓国教会の最大の関心は、量的な成長であった。韓国教会は信者の数、教会堂の大きさ、献金額、予算規模など可視の数値として見せることの出来るものを重視し、それらの数値の拡張に関心を抱く物量主義に落ち込んでいた⁽¹⁴⁾。教会員を増やすために韓国教会が行なった代表的な方法は、軍隊の伝道と復興伝道集会であった。ハン・ギョンシクが主導した全軍信者化事業は1960年代末から、軍隊という特殊な状況に置かれた青年たちを対象とした集会を開き、多くの若者たちに洗礼を施した。軍人を対象とする伝道はもっとも効果的な伝道だという評価と共に、他方では自由が制限されている状況下で若者たちを改宗させることはX教信仰の自発的性格を害するものだという批難も受けた。

1970年代は復興運動がきわめて活発になされた時期であった。各教会、地方会や中会^{〔訳,8〕}、そして教団などが競って復興会を開いた。さらに超教

(14) ノ・チジュン『韓国P社会学』Seoul.ハヌル社.1998.p.99 参照.

派的な大規模集會も、ソウルと地方で繰り返し開催された。1973年5月16日から6月3日まで、地方の主要都市とソウルで「5,000万人をキリストに！」という主題で開催された“ビリー・グラハム (Billy Graham) 伝道集會”、1974年8月に開かれた大韓センソン教会 (CCC) 主催の“エクスプロ74”、そして1977年8月には32教団が連合して600余名の講師を動員した“77民族福音化聖會”、これらは参加者の延べ人数が数100万人に達した大規模集會であった。1980年の“80世界福音大會”は、韓国教会の成長速度が最高潮に達した時に開催された集會であって、1970年代を経て大きく成長した韓国教会の自信と力が表れた印象的な出来事であった⁽¹⁵⁾。韓国教会の宣教100周年を記念するため1984年に開かれた群集集會も、これらと同じ大型集會の伝統を継承するものであった。

朴正熙の維新体制が進行していた陰鬱な時期に、相続いて開催された1970年代の大規模復興伝道集會は、人々の政治社会的な不満を解消させる役割も果たした。例えば「イエスの革命=愛の第3爆発」という主題で人々が集まった“エクスプロ74”は、大学生宣教会が全世界に広めた“イエスの革命 (Jesus Revolution)”との関連として開かれた集まりであった。“イエスの革命”というのは、伝統的教会に飽き飽きして毛沢東やチェ・ゲバラのような英雄的革命家たちに魅力を感じていた1960年代のアメリカの大学生たちに、イエスのことを歴史上もっとも偉大な革命家として紹介し、それによって福音化を実行し、この世界を変える「革命」への参加をうながすという形を取って始められた伝道運動であった⁽¹⁶⁾。“エクスプロ74”の重要な目標の一つも、青少年・学生たちの感性的信仰を爆発させることにあった⁽¹⁷⁾。この集會に参加した若者たちが集団的「没我状態と陶醉感」のなかにあるのに、果たしてそのような状況にあって「苦しみうめいている国民たちの声」を本当に聞くことができるのか、と質問する者もいた⁽¹⁸⁾。

(15) 「世界宣教へのビジョンを植えよ」(『韓国X広報』1980.8.23)。それによると4日間の集會に延べ1,700万人が集まり、70万人の決心者、10万人の宣教師志願者が出た、という信じがたい主張を主催者側はなしている。

(16) Bill Bright, *Revolution Now* (San Bernardino, CA: Campus Crusade for Christ, 1968). 参照。

(17) 「聖靈の第3爆発」, 『韓国X広報』1974.2.23. 参照。

(18) キム・ジョンヨル「民族福音化と群衆集會」, 『基督教思想』1974.10. 所収. P.73,78 参照。また「エクスプレス74」に関する応対集「エクスプレス74を語る」, 『基督教思想』1974.10. 所収. pp.82-91. 参照。

全斗煥の新軍部が執権するや、民主主義を渴望していた国民の久しい願いは挫折し、そんな陰鬱な時に開催された“80世界福音化大会”についても、同じような質問を投げかけることが出来たであろう。この大会は、韓民族が福音化される時には、正義に満ちた社会が建設され、統一が達成される^{と主張した。}

1905年の乙巳条約〔日韓保護条約〕から1910年の庚戌国恥〔日韓併合条約〕に至る期間に起こった大復興や、日帝強占期に実施された復興運動および同期に開催された大小復興会などは、人々に暗澹とした現実を忘却させ、超越的な世界からの慰安を受け入れさせた。全国的になされた復興運動は、一方では異言、信仰による治癒、奇跡などを通して聖霊体験を強調し、もう一方では現実的幸福を約束することによって、奇事異蹟を願う民衆の信仰的要求とうまく調和していた。このように復興運動は、信徒たちの超越的な欲求を充足させつつ物質的・肉体的祝福を信仰と結びつけさせるための通路であり、復興運動は大衆をX教に引き入れるのに有用な方法であった。復興運動の熱気のなかで雨後の竹の子のごとく生じた数多くの祈禱院は、この復興集會を常設化するために造られた装置として、また聖霊体験と個人的問題を解決する場所として人気を集めた。祈禱院は、1960年代半ば以降の社会不安のなかで増加し始め、1980年代初めには300箇所、1990年代の初めにはその数は600箇所以上に急増した。しかしながら、一部の祈禱院で起きた非行的現象のゆえに、祈禱院集會は1970年代から厳しい批判に直面させられた。

当時それぞれの教団・教会が立てた目標は実現可能というよりは、単なる競争のためのスローガンに近かった。1970年代に「1万の教会、300万の信者」を目標として立てた聖潔教会は、1980年になってやっと“1,000教会、30万名以上の教会員”を持つことが出来た。しかしながら復興集會を介して伝道運動の熱気のなかにあった大部分の教団は、1970年代を経ながら教勢が大きく成長し、多くの教団が1970年代の間に教勢を2倍化させることが出来た。例えば監理教の場合、1976年から1985年までの10年の間スローガンとされた「5,000教会、100万信徒運動」は、目標とした教会数の約40%を達成したところで終わりはしたが、しかしそれだけでも約2倍に近い成長を示した。ところが各教団の急激な物量的成長は、

教団内部の結束力やX教全体の協力関係を弱体化させるという方向に展開した。軍事独裁と産業化の過程で発生したアノミー現象は、一方では教会が成長する原因を提供したものの、他方では伝統的な共同体の倫理を崩壊させ、教会の人的・物的支援が個教会の維持と拡張に集中するという利己的な個教会主義を生んだ⁽¹⁹⁾。

3節-(2) 「チャーチ教会成長論の導入」

韓国教会の量的成長全盛期であった1970年代に、教会成長を夢見た韓国教会の指導者たちに大きい影響を与えたのは、アメリカから入って来た教会成長理論 [Church Growth Theory] であった。教会成長学は、1960年にフラ－神学校 (Fuller Theological Seminary) のマックギャブラン (Donald McGavran) が基礎を据え、ワグナー (Peter Wagner) がそれを発展させた。この神学は元々新しい宣教学の理論として始められたが、時間が経つにつれ宣教学から分離され、独立した学問となった。つまり、この学問は伝統的な宣教と伝道の目標を教会成長に向けて修正し直し、教会の設置と拡張という目的のため、[従来の] 神学的原理の上に社会科学および行動科学を結合させた理論であった⁽²⁰⁾。教会成長論は、特に伝道に障害となった伝道の好機となるような社会的現象に関心を傾け、同質集団やアノミー現象を利用した集団改宗 [の実現] を主張した⁽²¹⁾ 〔訳.9〕。同様にこの理論は、宣教とは個人伝道ではなく大衆運動次元において展開するもの、土着文化と衝突するものではなく、その土着文化を巧みに利用すべきものであると教えた⁽²²⁾。また平信徒を訓練して、彼らを教会成長のために動員し、教会以外のパラ・チャーチ (Para・Church) 機関と関係せよと勧めるのも、この教会成長理論の特徴の一つであった。

フラ－神学校の教会成長論と共に、量的成長を渴望した韓国の教会に影響を与えたのは、アメリカの牧師シューラー (Robert Schuller) の教役理論であった^{〔訳.10〕}。「不可能はない」というスローガンに代表されるシュー

(19) ノ・チジュン上掲書.32頁、および三井ケン上掲.45頁、参照。

(20) Peter Wagner, *Church Growth and Whole Gospel* (San Francisco:Harper & Row,1981), p.75. 参照。

(21) 詳細は、Donald McGavran, *Understanding Church Growth* (Grand Rapids:Eerdmans,1970) 参照。

(22) Donald McGavran, *The Clash Between Christianity and Cultures* (Washington,DC:Canon Press,1974) . 参照。

ラーの理論は20世紀初頭のアメリカで始まり、ピール（Norman V. Peale）が広く流行させたもので、それは積極的思考（Positive Thinking）理論を教役の現場に適用させたものであった⁽²³⁾。ピールが言っている通り、シューラーにとっての宗教とは「喜びに満ちた人生の手段」となる神を信じ、その神の能力を享受する行為であった⁽²⁴⁾。従って人間の可能性を強調する穏健な神学、人々に希望を与える負担とならない説教、そして伝道をして成長する教会、これが彼シューラーの教役理論の中心を占めていた。さらにシューラーは、市場経済状況の上に載っかかっているアメリカの宗教状況のなかで教会が成功を収めるためには、経済力のある教会、すなわち大きくて捜しやすい教会、駐車するのが便利な教会、またよいプログラムがある教会、平信徒が熱心に参加し教会が自らをよく宣伝する教会、そのような教会を作らなければならないと主張した⁽²⁵⁾。フラー神学校の教会成長理論とは以上のごとく、マックギャブランとワグナーを始めとする理論家たちの著作によったのであるが、これらの著作が韓国国内に翻訳され紹介されつつその影響を受け始めたのである。多くの教役者たちが韓国の神学校で、あるいはフラー神学校に直接行って、この理論を学んだ。フラー神学校の教会成長論を受け入れた多数の教役者たちは、教会の成長を最優先の課題とした。特に“積極的思考方式”と“成長の神学”は、1970年代以降の韓国の大型教会でしばしば接することのできる内容のものとなっていた。韓国の多くの説教者たちが、シューラーやロバーツ（Oral Roberts）といった者たちの影響を受け、説教において積極的思考を強調した。チョ・ヨンギと監理教のキム・ソンドは、こうした説教によって大成功を収めた人物に属す。彼ら以外にも多くの教役者や復興師たちが積極的思考の重要性を強調し、信徒たちに自分の仕事に対する熱意と希望を持つように教え聞かせた。

教会成長のための諸理論は、目標を設定し、平信徒の教育を強化し、教

(23) 1952年の初めに出版され、186週間「ニューヨーク・タイムズ」ベストセラー・リストに載り続けたピール著『*The Power of Positive Thinking*（積極的思考の力）』は、約2,000万部が売れた。

(24) Robert Schuller, *Your Church Has Real Possibilities* (Glendale, CA: G/L Real Books, 1974.) pp.64-65. 参照. [邦訳『あなたの教会は必ず成功する：積極的教会形成論』聖文社、1977]。

(25) 同書、pp.7-15. 参照.

会のプログラムを開発するように奨励して、結果的にそれらは伝道と宣教に大きい刺激となった。しかしながら、教会成長主義は教会の成長に商業的なやり方をもって接近したために、物量主義と競争を助長し、外形的な成功を理想化させ、そのため何よりも“十字架の精神”を忘却させるものだ、という批判も併せて受けた。“積極的思考”は、セマウル運動^[訳.11]以降韓国を支配するようになった「やれば出来る[為せば成る、하면 된다]」という思考方式と一致しており、物質的祝福に関する教会の強調は、経済発展を通して物質的豊かさを強調した点では[当時の]政権と大差がなかった。また個の魂の救済に目を向けるという内面化に向けられた原理は、様々の現実的諸問題の構造的な原因から目を背けるようにさせてしまった。これらの点は、教会成長理論とそれを利用して教勢拡張に成功した諸教会が負わなければならない歴史的負債となった⁽²⁶⁾。

教会成長に対する関心が高まり、成長に関する諸理論が受容されるなかで生じた現象の一つは、教会が多様なプログラムを開発し活用したという点である。1960年代から韓国の教会は、徹夜祈祷会を初めとする様々の形態の祈祷会を開催し、平信徒を対象とした聖書勉強および弟子訓練プログラムを導入することによって、区域と属会の組織を強化し、全教会員を教会内の各種の宣教会や親交活動組織に束ね、様々の行事を提供するなどの努力を継続して展開した。これらの内もっとも重要なものは、1960年代後半から流行し始めた平信徒聖書勉強プログラムであった。ベテル聖書研究、クロスウェイ聖書研究、トゥリニティー聖書研究、ハンス・ウェーバー聖書研究方法論などがそれであった。これらのプログラムは体系的な聖書研究教材と方法を利用し、全教会員を対象にした聖書大学を開設して聖書勉強と弟子訓練を実施し、これを全国的現象へと発展させた。平信徒たちを動員し教育するためのこのようなプログラムは、教会員たちにアイデンティティーと所属感を持たせることとなり、伝道に対する使命感を植え付けその動機づけを誘発し、教会に活力を吹き込んだ。

韓国教会に浸透した教会成長への関心は、個教会主義を強く押し進め、周辺にある同じ教団の個別教会同士も熾烈な競争をするようにさせ、結果

(26) ハン・ワンサン、上掲 pp.219-222. 参照.

的に教団よりも個別教会が中心となって成長するという構造を作った。市場経済と大差なき宗教市場のなかで、大成長した大型教会が続々と誕生した。大都市は大市場であり、その大市場のなかに存在した一部の教会は世界的規模の教会に成長した。このような現象は、特に長老教の統合側に目立ちソウルだけでもヨンナク教会（영락）、クァンソン教会（광성）、ソマン教会（소망）などの大教会を誕生させた。同長老教合同側のチュンヒョン教会（충현）、チュンニャン教会（중량）、監理教のクムラン教会（금란）、クァンニム教会（광림）、オ・スンヂョル派のヨイド・スンボグム教会（여의도純福音教会）なども、それぞれの教団を代表する大型教会として登場した。大型教会は、教会員数と教会員比率がもっとも高いソウルに集中して現れた。また大型教会は、教役者のカリスマ性、人々の宗教的・現実的 necessary に応える大衆的説教、効率的な教会組織および教会行政、そして多様で優れた教育とプログラムなどを備えていた。

3節-(3) 「パラ・チャーチ (Para・Church) 運動」

韓国X教の量的成長は、伝統的教会の成長のみではなく「教会と併行して行なう」運動、すなわちパラ・チャーチ運動の活性化によって生じたものであった。この時期のパラ・チャーチ組織のなかで、もっとも代表的なものは学園宣教を目的とする諸団体であった。1948年に組織された学園内エキュメニカル運動団体である韓国X学生会総連盟（KSCF）を除けば、学園宣教組織の主流は海外で作られ、6・25戦争以降から国内に入り始めた保守的傾向の諸団体であった。1950年代には文書宣教団体の韓国X学生会（IVF）が、そしてのちの1970～1980年代に大規模復興集会の主役を演じることとなる韓国大学生宣教会（CCC）が、それぞれ[1950年代に]入って来た。そののち1960年代には弟子訓練で有名なナビゲーター（Navigators）が、また1970年代初めにはゴスペル賛美宣教で知られるイエス伝道団（YWAM）がそれぞれ国内にも組織された。これらに加え、以下のような国内的組織も協力加勢した。すなわち1950年代に組織された長老教（高神派）系列の学生信仰運動（SFC）と自発的學生運動として出発したジョイ宣教会（JOY）、1960年代初めに組織され1対1の聖書勉強で有名となった大学生聖書読解宣教会（UBF）、そして1970年代に始め

られた親米反共主義傾向をもったハンサラン宣教会など、いずれも国内で作られた諸組織であった⁽²⁷⁾。これらの学園宣教団体は、聖書勉強、小グループ集会、そして各種の修養会で行なわれる親交と弟子訓練を通しメンバーたちに敬虔な生活を教え、国内外における宣教と社会活動を奨励した。

韓国大学生宣教会（CCC）の10段階聖書研究過程に見られるように、学生宣教諸団体は組織的かつ体系的な聖書勉強の教材を作り、毎日の敬虔な生活を促進するためのQT教材〔QTはQuiet Timeの略〕、あるいは伝道に使用できる「サヨンリ（CCC）」や「ブリッジ（ネイゲイト）」のような伝道誌を開発して使った。彼らが開発した教材は、一般教会でも広く使用された。これら諸団体の学校内における活動は、弟子化という目的に集中されていた。効果的に弟子化を行なう作業のため、大部分の学園宣教団体は強力な権威を持った中央の指導者の下に、中堅幹事、所長幹事そして学生会員がいるという中央集権的な組織構造を形成していた。そのため、学園宣教諸団体は根本的には学生たちによる自治組織であったのではなく、むしろ学生を対象に宣教をし、学生たちを動員して宣教するための組織だったのである。

学園宣教団体は、激動の時代を生き混^な乱を舐めていた数多くの学生たちを改宗させて、体系的な信仰の訓練を通し、多くの教役者、平信徒指導者、そして宣教師たちを輩出し、教会の成長に大いなる寄与を果たした。しかしこれらの団体は例外なくきわめて保守的な神学に立っており、個の魂の救いと狭い意味での宣教および敬虔に執着し、社会全般の諸問題に対しては無知無関心であった。従って学園宣教団体が、長期化した軍事独裁および物量的成長第一主義の経済開発が惹起したあらゆる問題をどのように見るべきか、またその問題を解決するためにはどのように行動すべきか、という点に具体的な回答を与えることは困難であった。学生宣教団体に属していた学生たちは、他の学生活動に参加しない限り自分たちだけの世界で生きる場合が多く、卒業後も教会と当該宣教団体への忠誠度は維持するものの、社会において躍動的な活躍をする場合はまれであった。またこの諸

(27) チョ・ピョンホ『韓国X青年・学生運動100年史散策』Seoul, タンエスシンクルシ, 2005。イ・ヂョ
ン Chol 「'80年代X学生運動史(Ⅱ): 学園宣教運動」、『福音と状況』1992.10. 所収, pp.150-
151 参照。

団体は、学園に乱立し互いに競争の内に活動しつつ、宣教と福音伝播の名の下に量的な膨張を追及したため、自分たちの団体同士においてはもとより、既存の教会とも競合的な葛藤を引き起こしたりした。1990年に大型教会と学園宣教諸団体との間に協議としての“学園福音化協議会”が設定されたのは、かかる問題を解決するための努力の結果であった。

このような学園宣教運動の限界に悩んでいた学生たちによって作られたのが、進歩的福音主義運動であった。福音主義圏の内であって、信仰と社会参与の間に葛藤を感じていた進歩的気質の学生たちがソウル大学で1986年に結成した“X教文化研究会”は、実践的に「民衆の痛みを共に分かち合って！」をスローガンにする先駆的団体であった⁽²⁸⁾。この研究会はセミナーを通して、神の国、X教文化、解放の神学、マルクス主義などを学びながら、ポンチョンドン（봉천동・奉天洞）の貧民村にその基礎となる共同体を作り、託児所を運営し、農村活動、工場活動などを行なうことによって現場の中へと出ていった⁽²⁹⁾。1986年から1989年まで月刊で発行された「大学X新聞」は、X教文化研究会の機関紙の役割を担って、進歩的かつ福音主義に立つ学生たちの前衛に立って活躍した。1987年の大統領選挙は、保守的教会・団体を社会的行動へと駆り立てるための重要な契機となった。選挙を迎えてX教文化研究会の主導により、公正選挙への監視と民主政府樹立のための福音主義青年学生協会が結成され、軍事独裁を終息させようという社会的熱望に協力参加した。新軍部の核心であった盧泰愚^{ノテウ}が当選したため、民主政府樹立には失敗したけれども、この時の活動によって高められた社会参与意識は、1988年福音主義青年連合会および韓国X学生会（IVF）内の進歩的学生の集まりである連合学生会のような社会参与的団体の誕生につながった。

パラ・チャーチ運動が韓国教会に流行させた一つは、様々の形の文化事

(28) キムニョンが1990年国家保安法違反事件の時提出した「控訴理由書」の内容による。イ・ジョンチョル「80年代X学生運動史（Ⅳ）：学生自発的連合運動と進歩的福音主義運動」、『福音と状況』1992.12.p.134から重引。

(29) 生活共同体とも言う基礎共同体（Basic Christian Communities）は、カトリック教会における関心や価値、目的などに似ており、根本的で持続的な人間関係を形成しようとする人々の小共同体である。“解放の神学”に基づく南米カトリックは、かかる基礎共同体を社会参与のモデルとして活用した。「基礎共同体史論」『大学X新聞』1987.6.10.所収、「基礎共同体運動の深化・拡散」『大学X新聞』1987.10.16.所収。参照。

業であった。初期以来韓国 X 教の文化事業は、賛美歌演奏および文書出版を中心として展開された。ところで、1970年代から韓国教会全体に復興運動が展開されるにつれ、賛美歌以外に復興会でやさしく一緒に歌え、復興会の雰囲気にならざる多くの歌が歌われ始めた。こうした福音賛美歌は、大部分が外国から入って来て翻訳されたものであったが、韓国人の信仰情緒に合っている歌も創作され次々と現れるようになった。学園宣教諸団体は、宣教の手段として賛美歌を積極的に利用した。1970～1980年代の抑圧的な社会の雰囲気の下で、学園宣教諸団体が主導した賛美集会は、青年・学生たちから始まり爆発的な共感を得た。例えば、1987年オンヌリ(온누리)教会の青年たち数10名が始めた賛美集会は、たちまち木曜日夕刻ごとに数1,000名が集まる大集会に成長した。1980年代半ば以降、賛美集会は学園宣教団体だけではなく韓国教会全体に広がり、日常的なプログラムとなり、CCM(Contemporary Christian Music)といった専門分野へと定着していった。また時間が経つにつれ、青少年たちにアピールする力が強かった他の文化芸術領域、すなわち映像・映画・演劇・踊りなどが宣教と礼拝に利用され始め、専門化された文化事業団体が組織された。

学園宣教運動は、関心の範囲を韓国人海外留学生にまで広げた。留学生運動をリードしたのは1986年に始まったコスタ(KOSTA: Korean Students in America)であった。アメリカにいる[韓国人]留学生のための夏季信仰修養会から始まったこのコスタは、そののち国際福音主義学生連合会(Korean Students All Nations)に発展した。ホン・ジョンギル、イ・ドンウォンなどコスタを率いた者たちは、留学生を福音主義の信仰によって訓練し、学問と信仰を統一させるための指導者に育てるという抱負をいただいていた。コスタは1980年代後半から、韓国人留学生が急増し韓国教会が大々的にリバイバル化する環境のなか急成長して、北米地域だけではなくヨーロッパ、アジア、オセアニア、ロシアなど韓国人留学生がいる世界各国において開催された。名声と影響力が増大して行くなかで、コスタは留学生以外の韓国人移民者たちも参加する信仰集会へと発展していった。

第4節 海外宣教

韓国教会における外面的成長は、次に海外宣教への関心、および宣教師派遣への急激な増加につながった。解放後韓国教会は1956年、チュ・チャニョン、キム・スニルをタイ国に宣教師として派遣し海外宣教を開始した。1960年代以降の海外宣教運動がどれだけ大きく成長したのかということは、韓国教会が派遣した宣教師の数の変化によって確認できる。ある統計によれば、1964年から1978年までは毎年平均して3.3名の宣教師が派遣されている。ところがその直後、[1979年～]1989年までの10年間は、年平均46.6名の宣教師が派遣されている⁽³⁰⁾。これは宣教師の派遣が、1980年代になって急増したという事実を示している。実際、韓国が派遣した海外宣教に関する1980年代半ばの統計調査によると、200名の宣教師の内75.3%が1980年代になってから派遣された者たちであった⁽³¹⁾。1970年代には1年に100名に達しなかった全海外宣教師数が、1980年代には急増して1,000名をはるかに越え、1996年には4,402名と集計されている⁽³²⁾。1979年から1996年までの海外宣教師の数は、実に47倍以上に増加した。しかしながら宣教師派遣が競争としてなされるなか、各教団が海外の僑民〔海外居住の韓国人同胞〕を対象とする教役までも宣教とみなしたり、大学聖書読解宣教会がそうしたように韓国人海外留学生に宣教師という名称を付与したり、あるいは宣教先での改宗者たちを韓国内に連れて来て教育させたのち再び送り返して宣教師統計に加えたりする場合もあった。

海外宣教運動は韓国X教の教勢増加からは若干の遅れを取って、つまり教会が大成長した直後の1980年代に活性化し始めた。これは教会が成長を遂げ、人的・物的資源が充満し、自信と使命感が生まれた状態から、海外宣教が始まるという自然な現象として見る事が出来よう。これに加え

(30) ホン・チモ / キム・ソンファン『韓国教会海外宣教80周年史に現れた宣教問題点についての研究』Seoul, 総神大学, 1989.p.15 参照.

(31) チョン・ジェオク「韓国教会が派遣した宣教師たちの現状分析と宣教戦略問題に関する研究」『韓国文化研究院論叢』1968.12.p.48 参照.

(32) 韓国宣教情報研究センター編『韓国宣教ハンドブック』Seoul. 韓国海外宣教会出版部. 1996.p.23 参照.

て、民主化の一環として1989年に決定された“海外旅行自由化措置”が、海外宣教の活性化に大いに寄与した。すなわち、それまでは政府の許可なしに海外旅行は不可能であったが、“海外旅行自由化措置”によって誰でも自由に海外に出ることが可能となった。特にこの措置は、従来海外旅行に多くの制約を与えられていた青年・学生たちに海外進出の機会を提供した。

1970年代までの海外宣教は、各教団と教会の主導下でなされ、ある調査によれば1979年までに派遣された宣教師の99.6%が、教団や教会が送った者たちであった⁽³³⁾。ところが1980年代になると、学園宣教団体や海外宣教の専門団体が派遣した宣教師が急増した。多様な特徴と目的を持った学園宣教諸団体が、共通して標榜してきたことの一つが海外宣教であった。学園宣教諸団体は、集会和教育を通し感受性豊かな青年・学生たちを宣教師に志願させた。海外宣教運動の熱気が高潮するなか、各教団は宣教部を作り、韓国海外宣教会（GMF,1987）のような独立した宣教団が組織され、OMF（Overseas Missionary Fellowship,1980）、OM（Operation Mobilisation,1989）、SIM（Serving in Mission,1997）など海外宣教機関の支部が韓国内に組織された。1996年の統計によれば、海外宣教の関連機関は派遣機関が78箇所、訓練機関11箇所、研究機関4箇所など、総計113箇所に達しており、全宣教師のうち、教団から独立した宣教団体から派遣された者が42%に及んでいる⁽³⁴⁾。

韓国教会が派遣した海外宣教師の増加にともなって、宣教地も多様化され拡大化された。韓国教会の宣教地は1960年代までだけで言えば、東南アジアと台湾に集中していた。しかし1970年代に入り、海外の韓国人対象の教役をも“宣教”として認定するようになるや否や、北アメリカ、ヨーロッパ、日本、オーストラリア、アルゼンチンなど生活条件が整っており、その国が豊かであり、韓国人同胞が多い所に、宣教師たちが大挙して進出するようになった。しかし時間が経つにつれ、韓国人同胞を対象とする宣教師の比率は徐々に減っていった。1980年代になると、アフリカ、中東、インドとその近隣地域などの地に宣教地が拡大され、1992年中国と修交

(33) 上掲ホン・チモ/キム・ソンファン p.18 参照.

(34) 上掲『韓国宣教ハンドブック』pp.23-28 参照.

が成立するや、中国が重要な宣教地として浮上した。また1991年ソ連が解体し東欧の共産主義政権が崩壊すると、その地域に多くの宣教師が派遣され始めた。1996年現在、韓国の宣教師がもっとも多く進出している地域は、アジア（49.3%）であり、続いて中央アジアとコーカサス（13.1%）、ラテンアメリカ（9.8%）、アフリカ（7.9%）、そしてヨーロッパ（7%）と中東地域（6.1%）となっている⁽³⁵⁾。

国内と同じく海外宣教地でも、韓国教会は競争しつつ事業を展開した。教会員数や予算規模と同じように、派遣した宣教師の数が教会の規模を表す尺度のようにみなされ、各教会は競って宣教師を派遣したり、一部ではすでに派遣されている宣教師を再志願させる形を取って派遣宣教師の数を増やそうと努めたりした。こうした過程で、十分に訓練を受けていなかったり、使命感が欠如する者たちが派遣されたり、あるいは教団や宣教機関と協調していないまま各教会が任意に宣教師を派遣するなどの事件が発生した。さらに宣教地においては、派遣元の教派も教会も宣教機関も異なる各宣教師たちが、十分に相互協調なく「勝手に」仕事をして効果的な宣教が成り立たず、現地の諸教会が宣教師の利害関係に振り回され互いに競争関係に立たされるという弊害も生じた。また、アフリカ、東南アジア、ラテンアメリカなど低開発地域に派遣された宣教師たちの中には、現地の文化や伝統を十分に理解することも尊重することも出来ず、現地人にふさわしい教会を建設するのではなく、韓国式教会を移植させようとして人種的偏見から抜け出せず、力に勝る者の傲慢さを見せるなど、過去西洋の宣教師たちが見せつけた帝国主義的態度を踏襲するというケースも発生した⁽³⁶⁾。

韓国教会の海外宣教方式は種々の批判を受けたものの、海外宣教は韓国X教が世界の中で競合し世界のために奉仕して、さらに成熟したX教へと発展するための機会を提供した。海外宣教事業は時間の経過と共に徐々に益々完成され、2000年代に入ってから1万名以上の宣教師たちが、世

(35) 同上 pp.24-25 参照。

(36) 韓国教会の海外宣教にとっての各種問題に関しては、以下を参照（いずれも韓国X教歴史学会編（学会誌）『韓国X教と歴史：第28号「特集 韓国教会と海外宣教」』Seoul.韓国X教歴史研究所.2008.3.収録の3論文）。キムンス「韓国教会海外宣教政策」pp.28-32；ソン・スンホ「韓国教会タイ宣教の歴史」pp.78-83；キミョンナム「韓国教会のアジア地域宣教の歴史とその推移～イスラム紛争地域、パキスタン宣教の歴史を中心に～」pp.112-114 参照。

界各地において宣教活動を続けている。

—以上、「1960～1990 年代 韓国キリスト教の成長と発展 ～その現象と要因～」翻訳・完—
(韓国X教歴史学会『韓国Xの歴史・Ⅲ ～解放から 20 世紀末～』Seoul. 韓国X歴史研究所 .2009. 第 13 章)

《訳者注》

[訳 1] 「イエ長、高神派、基長、合同派、統合派」

初期以来、長老教会は「朝鮮耶穌教長老会」(のち「大韓イエス教長老会」略称「イエ長」)という単一の名の下に、韓国・朝鮮X教の最大教派であり続けた。しかし 1945 年解放以降、主に 3 回の分裂に伴ない、かかる多様な名称を持つ団体となる。ここでは分裂の過程・内容には触れず、その結果の「新名称」のみ羅列しておきたい。【第 1 回分裂】1945～52 年、高麗神学校を開設した最保守派が分裂し「大韓イエス教長老会・高神教会」を新設。いわゆる「高神派」の誕生。【第 2 回】1953～4 年頃。基長の誕生。進歩派の群れを代表する金在俊たちは「大韓イエス教長老会総会」によって除名され、新たに「韓国基督教長老会(略称、基長)」誕生。後の「民衆神学」はこの系統の神学者たちによる。【第 3 回】1959 年。「大韓イエス教長老会」内部でエキュメニカル運動への賛否をめぐり、「大韓イエス教長老会・統合教会(賛成派)」と「大韓イエス教長老会・合同教会(反対派)」に分裂。以上が本書にしばしば登場する「イエ長」「高神」「合同」「統合」「基長」の分裂過程である。なお「大韓イエス教長老会」の下には「高神」「合同」「統合」という上記の代表的大教派以外にも、主なものだけでも 30 を優に超える多数の中小教派が所属していると言う。

[訳 2] 「神の宣教 (Missio Dei, Mission of God, 하나님의 선교)」

宣教活動の内容を宣教師や教役に限定せず、歴史のなかで働く三位一体の広義の神の活動、およびその神の活動に参与するあらゆる事柄を宣教活動として捉える現代宣教神学の立場。「神の宣教」は WCC、Willigen 大会(1952 年)で公式に採用され、その後も様々な神学者、研究者によって展開されたが、その代表者の一人に、J.C.Hoekendijk があげられる。

[訳 3] 「維新体制」は 1972 年ごろ以降の朴大統領の政治体制を言う。1961 年、軍事クーデターによって政権を奪った朴正熙、金鍾泌らは、その後「日韓条約」提携(1965)、ヴェトナム戦争派兵(1965)など、日本およびアメリカとの関係強化を果たし経済立国化と軍事独裁の両輪の確立を目指す。その過程で、1972 年「南北共同声明」を発表し韓国の戦時下非常体制を強調。同年国内の政治的流動化を恐れ、非常戒厳令、国会解散、維新新憲法の公布などを施行し、強大な権限を大統領に与えた。また維新体制下、労働者の争議行為が非合法

化され、効率を追求する組織や「なせばなる」式の国民精神を国民に求めた。こうした国民精神は、農村のセマウル運動とも一体化して行く。また、この維新精神は、後の全斗煥政権にも継がれる。

[訳4]「開発独裁」。発展途上国における権威主義的な開発政策と強権政治を行なう体制。具体的には、1970年前後ラテンアメリカやアジアに現れた新しい形の独裁政権の姿を言う。経済発展を第一優先する政策が採られ、工業化、外国資本の導入が積極的にはかられると共に、この体制下では貧富の格差、国民の政治的・経済的・労働的犠牲が強いられ、これを強力な軍事力で抑圧するという共通点を持つ。インドネシアのスハルト体制やフィリピンのマルコス体制などがその典型とされる。韓国では朴大統領独裁制を「開発独裁」とも称す。

[訳5] 韓国語では「자아 정체성、自我正体性」あるいは「정체성、正体性」。一般に「アイデンティティー、identity、自己同一性」と訳される。本論で著者が問題とするアイデンティティーは、「人口の急激な都市集中化」と「教会の成長」との因果関係を解く重要概念として登場する。農村や田舎では、ほとんどの人間が知り合いである「親しい共同体」を形作る。特に「同族村」などの伝統を有す韓国では一層そうであった。ところが韓国では1970～80年代という極めて短時間の内に、しかも数百万人もの大人口がソウルなど大都市に移動することによって、マンション住宅に代表される、みんなが他人という仮想敵対的で無関心な人倫空間が生じ、人々は自己が所属すべき場とアイデンティティーを喪失するという深刻な精神的状況に投げ出された。韓国では教会が、その時期に人々に所属場所とアイデンティティーを提供することによって大成長を遂げたとされる。経済構造の急激な変化、人口の急激な都市集中、農村と村文化や故郷の人倫文化の喪失、アイデンティティーの喪失、しかも労働条件は最悪で、政治的には独裁体制下自由にもものも言えず人権は無視など。これらの教会外の要因、すなわち「人倫文化的」「社会心理的」および「政治・経済的」要因が、韓国X教大成長の大きい原因となって深く関わっている。1960年以降の韓国X教史研究は、かかる社会思想史との協働が不可欠であり、これが研究をより多角的拡散的にするという困難さを伴なう。

[訳6]「anomie、アノミー」。ギリシャ語 anomia（無規則性、神法の無視）を元に、社会学者デュルケムは、伝統的価値や社会的規準の崩壊による社会秩序の崩壊状態をアノミーと称した。社会の伝統的価値体系の崩壊によって生まれるアナキーな状態を「社会的アノミー」と称したり、こうした環境から個人が不安、崩壊感覚、無気力に陥る状態を「心理的アノミー」と称したりする。

[訳7] para はギリシャ語「～と並んで」。従って、para-Church は、教会外の現象で、教会と併行してなされる事象を意味する。

[訳 8] 韓国語原文は「老会、^{ノフス}노회」。日本語では「中会」にあたる。長老教会においては一定の区域を限って、その区域の説教長老（牧師）、治会長老（長老）による会議決議機関を重視する。これを英語では“Presbytery”と言い、日本語では「中会」と訳すが、韓国では1907年「老会」の名称にすることを決議している（しかし「長老会」の名称も併用）。また同じ1907年初期韓国X教は、「独老会」という名称を「大会（総会）」の意味で用いることも決議した（ただし「独老会」の用語は1907～1912年まで）。

[訳 9] 「集団改宗」。宣教史を振り返れば、過去「個人改宗（Individual Conversion）」に比し「集団改宗（Mass Conversion）」によるX教改宗者は決して少なくなく、むしろ量的には集団改宗による信徒数のほうが多いかもしれない。中世における一国全体のカトリック改宗の諸例や、近世近代におけるラテンアメリカやフィリピンのようにスペイン、ポルトガルによる侵略と一体化したカトリックへの集団改宗など。プロテスタントにおいてもアジア地域の伝道は、インドが極端な例であるように特定カーストへの集団改宗以外の宣教方法は不可能であった。個人が個人の意思だけで改宗者になるためには、一定の市民社会の成熟や多様な社会階層を肯定する社会思想が前提される。しかし例えば、上のインド以外にもイラク、サウディアラビア、インドネシア、パキスタンなどのイスラム教支配圏地域で、そこに属す個人がX教に改宗することは、普通彼と彼の家族の死を意味する。彼が属す特定集団や特定部族全体が「集団改宗」して初めて、彼の「個人的改宗」が可能となる。その場合一般に、国王や集団の長^{ボム}や部族長がまず改宗し、次にその集団に所属する構成者全体が、王や部族長に従って「集団改宗」する。日本や韓国は歴史上まれな「個人改宗」主体の国であり、従って「集団改宗」には無関心な国であるが、Church Growth Theory に立って「宣教」を考える時、この「集団改宗」あるいは「トップ伝道」は重要な研究課題とならざるを得ない。

[訳 10] 「教役、教役者」。「教役」とは教会の活動全体を指すが、「教役者」といえば本文のように狭義には牧師（あるいは有給の副牧師、伝道師）を意味する。従って、ここで言う「教役理論」とは、牧師（副牧師、伝道師など）が教会を牧会する方法や理論を意味する。

[訳 11] 「セマウル運動」。セマウルとは、새（新しい）、마을（村）、従って「新しい村」運動の意。1970年代、朴政権による農村政策として始められたが、後には「都市セマウル運動」「工場セマウル運動」など農村から都市に波及し、[訳注 3] にのべた維新体制を支える重要な精神主義へと発展、および一体化していく。